

(6) 前掲「不思議現象とTV番組」。

(7) 白石信子・井田美恵子「浸透した『現代的なテレビの見方』」『放送研究と調査五月号』、二〇〇五年、二六一五五頁。

(8) 前掲「不思議現象とTV番組」。

(9) 前掲「不思議現象とTV番組」。

(10) 前掲「不思議現象とTV番組」。

(11) 小城英子・坂田浩之・川上正浩「不思議現象に対する態度・態度構造の分析と類型化」『社会心理学研究』二三、二〇〇八年、二四六一二五八頁。

(12) 小塩真司「血液型性格判断を肯定する態度と非科学信念の関係」『日本心理学会第七回大会発表論文集』、二〇〇七年、一二二二頁。

(13) 濱戸一夫『科学的思考とは何だろうか——ものづく

りの視点から』筑摩書房、二〇〇四年。

(14) 野村一夫「メディア仕掛けの『健康』」野村一夫・北澤一利・田中聰・高岡裕之・柄本三代子『健康ブームを読み解く』青弓社、二〇〇三年、一三五六頁。

(15) 前掲「メディア仕掛けの『健康』」一三五六頁。

(16) 小城英子・坂田浩之・川上正浩「ブームとしての不思議現象」『聖心女子大学論叢』一〇九、二〇〇七年b、三三一七四頁。

※本稿は、小城・坂田・川上（二〇〇七年a）、小城・坂田・川上（二〇〇七年b）、小城・坂田・川上（印刷中）を再構成し、加筆・修正を行つたものである。出典やデータの詳細は、そちらを参照されたい。

# ヴァーチャル参拝のゆくえ

特集 メディアが生み出す神々

黒崎 浩行  
くろさき ひろゆき

ホームページに対して神社本庁は「ネット上に神靈は存在しない」として自肅を求める通知を出しているが、神

一〇〇六年（平成十八）の年末から翌年の始めにかけて、「ネット参拝」をめぐる記事があいついで新聞・雑誌に掲載された。そしてそれを追う形で、民放テレビのニュース・情報番組でも、この問題がとりあげられた。

そのひとつ、TBSの昼の情報番組「ピンポン」の二〇〇七年一月四日放送では、同日付けの『スポーツニッポン』の記事「お手軽web参拝に神社本庁『自肅せよ』」が紹介された。記事の内容は、入力フォームに住所、氏名、願い事を書いて送信ボタンを押すと参拝が終了する、という神社のホームページを挙げ、そのような

ホームペー

ジに対して神社本庁は「ネット上に神靈は存在しない」として自肅を求める通知を出しているが、神社本側は、従来から郵便やファックス等で祈願を受け付けていたのと何が違うのか、と反論しており、また「遙拝」として見ることができのではないか、という意見もあることを紹介したものである。スタジオではさらに、神社本庁は「國のお役所」ではなく、全国約八万の神社を統括する宗教法人であるという解説を加えた。

る神社の尊厳性の護持上、問題となる事項」として、次の三つを挙げている。

(1) 社会一般の健全な信仰を害する、いはゆる「バーチャル参拝」のやうなインターネットを通じた拝礼等の行為を勧奨すること

(2) 祈願は参拝を以て行ふといふ原則にもとる、願主の参拝を伴はない祈願の執行を「通信祈願」等と称してインターネット上で日常的に喧伝すること

(3) 神符守札を一般商品（課税物品）販売と同様にインターネット上で発行すること<sup>(1)</sup>

そして、「参考規程及び解説類」として神社本庁憲章をはじめとする諸規程や、神社本庁教化部が発行する『月刊若木』所収の解説類を挙げ、これら規程等を遵守してインターネットの適正な利用を図るよう都道府県神社庁に指導を求めているものである。

この通知が出された七月から五か月近くもたつた年末に、なぜこの問題がマスメディアでとりあげられるようになったのか、その理由ははつきりとはわからない。た

だ、この通知が出された後、神社本庁では一〇月に各都道府県神社庁の担当者を集めた「インターネットに関する研究会」を催すなど、この通知の趣旨への理解を深めための活動を継続的に行っていた。また、初詣を目前に控えた時期にふさわしい話題だから取材・報道がなされたという可能性もあるだろう。

もつとも、ネット参拝への賛否がマスメディアにとりあげられたのは、今回が初めてのことではない。その最初のものは、一九九七年（平成九）八月二四日の『産経新聞』の記事「バーチャル参拝 是か非か」である。この記事では、東京都港区に鎮座する愛宕神社のホームページがとりあげられ、そのコンテンツである「ヴァーチャル参拝」をめぐって、東京都神社庁の次のような批判的なコメントが載せられていた。

神社にお参りするというのは、画面を拝めばいいと いうものではありません。おみくじも社頭で引いてこそ意味があるのです。また、インターネットで崇敬者を募集するようなことがあれば、神道のあり方

から逸脱しますので、開設にあたつて何らかの制限を設けたいと思っています。<sup>(2)</sup>

当時から現在まで、愛宕神社のホームページを制作しているのは、権利宣の松岡里枝氏である。松岡氏は、一九九九年に財団法人国際宗教研究所が主催したシンポジウム「インターネット時代の宗教」にパネリストとして登壇し、一部に拒否反応はあるものの、楽しくわかりやすい神社のホームページは一般の人々に好評であり、社会における神社のアカウンタビリティを高めるためにも有効であることを述べている。<sup>(3)</sup>

このように、神社界では「ネット参拝」や「ヴァーチャル参拝」について、インターネットを利用した新しい教化活動という認識が一部にある一方で、「神社の尊厳性」を損なうものとして問題視する立場があり、そのような中で十年以上にわたって議論が続いてきたのである。本稿では、インターネットの普及当初から話題にのぼってきた「ヴァーチャル参拝」（マスコミ報道では「ネット参拝」などとも表現されるが、本稿ではこの表現に統一す

る）が、現代に至る伝統宗教の状況を一面において表しているのではないかという問題意識に立ち、やや広い視点からこの問題を俯瞰してみたい。

そこで、まずは「ヴァーチャル」とは何か、というところから議論を始める。そのうえで、日本における寺社參詣の歴史を振り返ったときに、インターネットが普及する以前からすでに「参拝のヴァーチャル化」が進んできたのではないか、ということを見てゆく。さらに近年のメディアとの関わりのなかでの傾向をとらえてみることにしたい。

## 二 「ヴァーチャル」とは何か

「ヴァーチャル」という言葉や、その訳語である「仮想」という言葉は、すでに日常用語として一定の質感を獲得しているように思われる。それは、コンピュータや携帯電話をはじめとする情報機器・環境の日常生活への浸透、SF映画『マトリックス』（ウォーシャウスキー兄弟監督、一九九九年アメリカ）などのボビュラー文化の世界観やコンピュータ・ゲームの操作感覚の広がり、さらには